

「水平社宣言」讃歌

「全国に散在する吾が特殊部落民よ、団結せよ！」

何と言うすばらしい呼びかけであることよ！
何と誇らしい提言であることよ！
そして、又、何と、つよく肺腑に應える言葉であることよ！
何と勇気を鼓舞させるつよい叫びであることよ！

とまれ、

「特殊部落」

この言葉の、何とはらだたい言葉であることよ。
われわれは、決して特殊ではないぞ！
われわれは、この特殊部落と言う言葉の差別性に、
はげしい怒りをおぼえる。
われわれに対する差別は、
厳然として存在している事実なのだ。

しかるが故に、宣言は、

自ら、「全国の特特殊部落民よ！」とよびかけた。

兄弟よ、

自ら「特殊部落民」と呼びかけた事は、

自ら「特殊部落民」と言う差別語を肯定するものではないぞ。

「特殊部落民」として差別をうくるが故にこそ、

「全国の特特殊部落民よ団結せよ！」と、よびかけたのだ。

「特殊部落」

この言葉の、何と差別に満ちた言葉であることよ。

「特殊部落」

この言葉は、行政がつくり出した差別語そのものなのだ。

われわれの部落は、

差別の被害をうける被差別部落。

われわれの部落は、

解放をひたすらねがう封鎖されし部落。

われわれの部落は、

未だ解放されざる未解放部落。

このわれわれの部落をして、特殊部落と言う。

見よ！決然と呼びかけたこの悲壮を！

聞け！昂然と呼びかけたこの提言を！

この力づよい呼びかけに、

このすばらしい呼びかけに、

われら未解放部落の同人たちは、

耳をそばだたせ、まなこをひらき、

口をひきしめ、こぶしを握り、

惰眠をげちらし、起ちあがり、

「おーっ！団結だ！」と喊声をあげて呼応した。

「全国の特特殊部落民よ団結せよ！」

あゝ、何と言う感動的な呼びかけであることよ！

「長い間、虐められて来た兄弟よ、」

まこと、

長い間の、むごい、手びどい、

差別と迫害の連続であったことよ。

そして、

これは今もなお、

われわれに、おしかぶさっている冷厳なる事実なのだ。

この差別の迫害によって、

多くの兄弟たちは、

或いは屈辱に涙をしぼり、

或いは貧窮にうちひしがれ、

人間外の人間として、冷酷、残忍な処遇に泣かされた。

出水に慄く河原の部落の友。

崖くずれにおびえる山すその部落の人、

せまい地域に圧縮され、傾く家の中で、呻吟する都市の部落の同胞、

かてて、くわえて、

主要生産の座からは疎外され、

まともなしごとから締め出され、

苦しいくらしに追いやられ、

無情な飢饉を強いられた。

われわれの歴史は、残虐の連続であり、

憤恨の記録であった。

まこと、

「長い間、虐められて来た兄弟であった。」

「過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等の為めの運動が、何らの有難い効果をもたらさなかった事実は夫等のすべてが、吾々によって、又他の人々によって毎に人間を冒瀆されていた罰であったのだ。」

過去半世紀間になされたと言うわれらのための運動は、

差別から解放せねばならぬとの行動は、

果して、何がなされたと言うのか！

明治四年の太政官布告、

「エタ、非人の称を廃すべき候こと」

この布告で、どんなききめがあったと言うのか。

一片の空々しい文章だけで終ったではないか。

この一片の空文は、人間冒瀆以外、何ものなかったではないか。

明治四年にこの解放令？この布告を出しながら、

明治五年、壬申戸籍と言う差別戸籍をつくったではないか。

過去半世紀間に種々の方法と、

多くの人々によってなされた吾等の為め？の運動が、

何等の有難い効果をもたらさなかったことは、明白なる事実だ。

ききめがなかったと言うことは、

われわれ自身の、解放への行動も、

自らの主体的自覚の上に立った行動でなく、

他の人々の行動も、

これ又、解放の認識の上に立った行動ではなかった。

それゆえに、

これらの運動は何らのききめを、もたらさなかったのだ。

それは、われわれ部落大衆にとっても、

又、他の人々にとっても、

人間を冒瀆され、

人間を冒瀆して来た、

罰でもあり、

罪でもあったのだ。

「そして、これらの人間を動かすかの如き運動は、かえって多くの兄弟を墮落させたことを想へば」

これらの人間を動かすかの如き運動、
そうだ、まさに、人間を動かすのとき行為であった。
実に、それは欺瞞的融和政策であり、
悪辣な頭などで対策であり、
糊塗的な、一時治療的手段であり、
偽善的な、慈善的、手くだであった。
そして、このことは、
すこぶる多くの兄弟たちも墮落させてしまった。

宣言は、このことを鋭く見ぬき、
するどく迫った。

さらに差別者どもは、
「ねた子を起こすな。」との、
アヘン的、文句をねつ造し、
これを巧みに利用し、
すこぶる多くの兄弟たちをして、
解放の方向を見うしなわせ、
解放への行動を停滞させてしまった。
「ねた子を起こすな。」
それは、われらの思想を麻痺させるはげしい毒薬であり、
われらの方向を誤らせる悪魔の囁きであり、
われらの行動をにぶらせる邪悪の声である。
更に、さらに、
差別にかかわる一切の責任を、
われらの責任であるときめつけ、
言葉をよくせ、
行ないをつつしめ、
まじめに働け、
粗暴な集団活動をするな、と、
われらにのみ、その改善を迫ったでないか。
そして、おのれ自身は、
更に、さらに、
融和的体質をつちかい、
差別的思想をつよめてきたではないか。
兄弟よ、
われわれは、これらの、人間を動かすのとき、
欺瞞を見やぶらねばならぬ。

- ◎ しつ黒の差別の帳ひきざれ引き裂け千々に形果つるまで
- ◎ しいたげに怒り燃すべし蔑みに憤るべし差別うくる子よ

「この際、吾等の中より、人間を尊敬することによって、自ら解放せんとする集団運動を起せるは寧ろ必然である。」

そうだ、
.....
人間は動くものにあらず、
.....
人間は尊重するべきものなり。

人間を尊敬することは、
人類の永遠の哲理。
基本的人権の尊重は、
人類普遍の原理。

この人類普遍の原理にそって、
人間の尊敬を実現するために、
差別と屈辱からの解放をたたかいたるために、
自らの主体によって、
自らのちからによって、
われわれは敢然と奮起したものである。

太陽は、夜が明けたので、昇ってくるのではないぞ、
れい明にみちびかれて、太陽は現われるのではないぞ。
太陽が昇るから夜が明けるのだ、
太陽が近づくかられい明があるのだ。

解放のれい明も、まさにこれに似たり。
解放のれい明は、われわれの主体的な行動によってのみ来るのだ。
即ち

解放をかちとることは、
自ら解放せんとするものの集団運動によってのみ、
結実するものである。
しかるが故に、
われらの申より、自らの集団運動を起こすこと、
これは必然であり、
また当然である。

そして、われわれの解放運動は、
われわれ部落大衆のみの尊敬を希っているものではない。
われわれの運動は、決してセクト的ではない。
「人間を尊敬することによって、」と、
すべての人間の尊敬をねがい、
すべての人の、人権の尊重を提唱しているのである。

そして、この運動を起こすことは、
天の、われわれに下した使命であり、
われわれの、天賦の課題でもあるのだ。
そして、これこそ、
◎ 眞実に対する運命であり、
崇高な理性の当然であり、
人間生存の厳然たる倫理である。

まこと、
「われわれの集団運動を起こすのは寧ろ必然である。」
そうだ！ そうだ！ そうだ！

「兄弟よ」

何と言う心温まる骨肉の呼びかけであることよ！
そして何と言う血盟を誓う、同人的な呼びかけであることよ！

血は水よりも濃いとか、
差別と屈辱にひしがれた、同じ運命に泣く同人たちよ、
われわれは、生と死を同じくする、
まこと、兄弟なのである。

兄弟よ、

この呼びかけこそ、
ながい眠りをさまさんとする、
やさしい母のことばであり、
惰眠と安逸をゆるさぬ、
きびしい父の叱責でもある。

「吾等の祖先は自由、平等の渴仰者であり、実行者であった。」

そうだ、
われわれの祖先は、
つねに自由と平等をかちとるために、
たたかいつづけて来た。
そして、
つねに自由を礼讃し、自由を願い、自由を求めてきた。
人間は、生まれながらにして自由であり、
個人の尊厳と権利は、平等である。

この大原則を、われわれはつねに体し、
この大原則を、われわれは一時も忘れなかった。
これこそは、われわれのかさず燦たる旗幟であり、
これこそは、人類普遍の原理、生存の基調であった。

そして、われわれの祖先は、
自由、平等の実現へのための実行者であった。

あゝ、かくの如き価値高いこの営みの実行者であるために、
かえって、はげしい迫害に見舞われた。
正しい行動を推進する至純なる人間が、
かえって迫害を受くとは、
あゝ、何たる矛盾、
何たる不合理。

「ろう劣なる階級政策の犠牲者であり、男らしき、産業的殉教者であったのだ！」

おのれの支配体制の保持のため、
ろう劣なる階級制度をつくり出し、
われわれを、人間外の人間として、
最も下層のわくにおとし入れ、
巧みに国民の分裂をしくみ、
あらゆるはずかしめと、迫害をもって、
われわれに、のしかかって来たではないか。

まこと、われわれは、分裂政策の犠牲者であり、
身分階層の被害者であり、
痛恨きまわらない受難者の群である。

そして、
主要産業の座から追いやられ、
貧困のくるしみに打ちめされ、
まともな労働から締め出され、
人のいやがるしごとにつかされた。

産業的殉教者われわれは、
腹だたしいかな、
むりやりに貧窮の苦汁をすすらされた。

「かまどには、火気ふき立てず、
こしきには、くもの巣、懸きて、
飯かしく、事もわすれて、
ぬえどりの、のどよい居るに」と、
うたいし万葉の、貧窮問答、さながらに、
われわれの兄弟は、
犠牲と貧困に打ちめされた。

あゝ、天よ、
大地に伏して嘆息し、
虚空に向って慟哭す、
われらの怨嗟の声をきけ！
兄弟よ、
われわれの祖先は、自由・平等の渴仰者であった。
このことを双手をあげて誇れ！
われわれの祖先は、階級政策の犠牲者であった。
このことを、鉄拳を握りて怒れ！
われわれの父母は、産業的殉教者であった。
このことを、歯を切していきどおれ！

「ケモノの皮剥く報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎとられ、
ケモノの心臓を裂く代価として暖かい人間の心臓を引裂かれ、そ
こへ、下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた。」

あゝ、何たる残忍、
何たる無惨、
かくのごとき、酷いことが、許されてよいものか。
おのれの戦道具の必需の皮の生産を、われわれに押しつけた。
兄弟たちは、人の忌避する生産過程をたえしのび、
ケモノの皮剥くしごとをも、
ケモノの心臓ひき裂くしぐさをも、
黙々として、なりわいとした。

「駕籠に乗る人、かつぐ人、その又、草履をつくる人」と、
草履づくりのわれわれは、最下層の身分として、おしこめられた。
煙管の火を乞うに、捨て火をされ、
おろおろと、拾われた部落の老人。
下駄をはくことを禁じられたハダシの子は、
灼熱の大地に、足を焼き、
布地の帯しめることを禁じられた、おびなし子は、
藁なわの帯をさせられた。
ハダシの子は、部落の子と、さげすまれ、
帯なし子は、差別の子と、見下げられ、
美しさを求めることすら禁じられた部落の子らは、
「だらしなし。」と、嘲られた。

あゝ、
皮を剥かれた報酬として、
「エタ」なる侮蔑の烙印を焼きつけられ、
心臓を裂かれた代価として、
「四つ」なる獣視のまなこを投げつけられ、
更に残酷なり、その上に、
嘲笑の唾まで吐きかけられた。

むごい！
むごい！
むごい！
こんなむごいことがあるものか。
これこそ、まさに、
この世の地ごく、生き地獄！

むごい！
むごい！
むごい！

「呪われの夜の悪夢のうちにも、なお誇り得る人間の血は濁れずにあった。」

あゝ、呪われの夜、
痛恨の夜、
悲痛の夜、
被差別の苦しい永い夜、
愉しみも、絶たれた味けなき日ぐらし、
望みも見あたらぬ日かげの毎日。

されど、されど、
われらには、尚、誇り得る人間の血は濁れずにあった。
あゝ、何と言う感動ぞ、
何と言う決定的な叫びぞ。

俺の胸はつまった、
とめどなく感動の涙はながれる！
血管はぼう張した、
どくっ、どくっ、血潮は湧っている！
そうだ、
俺の血は濁れてはいない！
俺の血は濁れてはいない！

再び唱えたい、
「尚、誇り得る人間の血は濁れずにあった。」と。

人間外の人間として、
この世に又となき程のむざんさに、
打ちめされたわれわれにも、
見よ、人間として誇り得る尊い血潮が、
清純な鮮血が、五体をかけ巡り、
真っ赤な血潮が、全身に、たぎっているではないか。

われわれも人間なんだ！
まぎれもない尊い人間なんだ！

そうだ、
人間の血は濁れずにあったのだ！

どっ、どっ、どっ、
生命の鼓動がきこえる。
びくっ、びくっ、びくっ、
血脈の液は奔流している。
ずきっ、ずきっ、ずきっ、
心臓は、生命の歓喜を叫んでいる。

血潮は脈うつ、
この血は侮蔑を怒った血、
この血は屈辱にたぎった血、
そして、ながいながい迫害にも、
濁れずにあった誇り得る血。

俺の血潮のたかまりは、
感きわまって、最高潮に達した。
俺のごぶしは、しらすしらずの間に、
かたくかたく握りしめられているではないか。

「尚、誇り得る人間の血は濁れずにあった。」

「そうだ！そうして吾々は、この血を享けて人間が神にかわろうとする時代にあつたのだ」

そうだ、
われわれは、この血を享けて、
人間が神に代る時代におうたのだ。

人間が神に代る！
人間が神に代る！
あゝ今、この願いが、ここに結集し、
人間の誇りをたたえ、
人間の尊厳を訴え、
人間は何よりも尊いことを宣べている。

人間が神にかわろうとする時代に遭遇した。
いや、とまれ！
神にかわろうとする時代におうたとは、
単に出合ったと言うことではない。
われわれは、人間が神に代ろうとする時代を創造するとのことだ。
呪われの被差別の中にも、
尚、濁れずにあった祖先の血を享けて、
われわれは、崇高な人間尊重の時代を創り出す時におうたのだ。

「犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者がその荆冠を祝福される時が来たのだ。」

われわれには実にながい犠牲の歴史だった。
特殊部落民と言われ、こよなき冒涇をうけた。
人間冒涇の許すべからざる罪惡を、
今、断呼として抗議すべき時が来た。
人権無視の烙印を、
人間冒涇の烙印を、
貧窮と逆境の烙印を、
断呼として投げ返す時が来た。

投げ返す！
これは不正に対する抗議であり、
差別に対する糾弾である。

同志たちよ、
抗議こそ、正しさを求めるわれわれの正義のいとなみと知れ、
糾弾こそ、被差別者たるわれわれの権利の実行と知れ。
差別に対しては、断呼、糾弾せねばならぬ、
不合理、矛盾に対しては、断呼、斗争せねばならぬ。
糾弾を不当と言ひ張る者は、
差別をなおも温存しようとする悪らつな謀者なり。
犠牲者よ、
断呼としてその烙印を投げ返せ、
糾弾こそ正しきものと確信せよ、
糾弾こそ人間の崇高なる権利と確信せよ。

そして、権力に抗した、彼の殉教者が、
いばらの冠をのせられ、処刑された故事を想起せよ。
そして今日、
いまその荆冠が祝福されている事実を直視せよ。
受難は荆冠として祝福された、
これこそ、解放を願う象徴。
いばらの冠は、解放へのシンボルとして、描かれた、
荆冠はわれらに道を照らしている。
解放の旗、荆冠旗はかくして生まれたり。

兄弟よ、
烙印を投げ返す糾弾は、
解放への行動であり、
受難をしるす荊冠は、
解放への願望である。

されど、
このことは、われわれの主體的な行動によってのみ、
かちとれるものである。
その時が来た！
その時期は到来した！

「われわれは、エタであることを誇り得る時が来たのだ！」

あゝ、何たる感動ぞ！
あゝ、何たる叫びぞ！

とまれ！
われわれは、エタと言われ、
「四つ」と侮られている事を、誇れ！と言うのではないぞ。
差別を受けていることを誇れ、よろこべと言うのではないぞ。
エタであることを誇れとは、
われわれには、差別の屈辱を、うけたためしがあるが、
われわれは、人を差別した、ためしがない。
われわれには、人間外の人間として虐められたことがあっても、
他の人を、人間外の人間として、処遇した事実はない。
人間を尊敬することを、命のようにだじにしてきたことが
あっても、
人間を、エタだ、四つだと、差別してきたことがない。
このこと故に、
われわれこそ、人間を尊重せよ！と、
叫ぶ権利がある、と、言うことだ。

「われわれは、エタであることを誇り得る」とはこのことなのだ。

尚、更に、
われわれには、差別と闘う、解放をかちとる、と言う、
崇高な行動を推進する使命がある。
差別を、うくるが故にこそ、
差別とたたかう権利があり、
エタと言われる、ためにこそ、
人間の尊厳を訴える権利がある。
「われわれが、エタであることを誇り得る」とは、
この権利を誇り得る、ことなのだ。

あゝ、何と言う誇らしいことぞ！

そして、この価値あるたたかいを、すすめる時、
そのときは今だ！
今、きたのだ！

何たるよろこびぞ！
まさに、
「われわれは、エタであることを、誇り得る時が来たのだ！」

「吾吾はかならず卑屈なる言葉と怯懦なる行為によって、祖先を
辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。」

兄弟よ、
われわれは、われわれに対するこの戒めを、
厳肅に傾聴しなくてはならぬ。
われわれは、自らの力で、解放をかちとることを願うが故に、
ゆめ、卑屈の群れであってはならぬ。
われわれは差別の屈辱からの解放を願うが故に、
ゆめ、怯懦の徒輩であってはならぬ。

卑屈と怯懦、
これこそは、われわれ自身、
又、他の人々と、すべてのものの、
人間冒瀆につらなり、
人権否定にかかわるものである。

ゆえにこそ、われわれの祖先は、
つねに卑屈をいましめ、
怯懦をきらって来た。
われわれは、自らの力で解放をかちとる営みをつづけたために、
必して、必して、
卑屈と、怯懦であってはならぬ。
襟を正して、この祖先の戒めを、拝聴せねばならぬ。

「そして、人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を動かす
ことが何んであるかを、よく知っている吾々は、心から人生の熱と
光を、願求礼讃するものである。」

人の世は、連帯によって結ばれ、
あたたかい人間同志の連帯社会でなくてはならぬ。
しかるに、人の世は冷酷無惨、
「人の世の冷たさが、何んなに冷たいか」
われわれは、このことの例を、
いくた、幾多、知っている。
すべての人は、ともども幸せである、
そう言う世の中でありたい。
これは人間のねがいのまこと、
人間のあゆみの、真実。
しかるに、人の世は、
人を動かすことを知らない世の中、
人を尊敬することを知らない世の中。

われわれは、かゝる冷酷な世の中を、
あかるい光に充ちた世の中に、
われわれはかゝる冷たい世の中を、
あたたかい人間の情熱の交う世の中に、
われわれは、創り出さねばならぬ。

われわれは、差別のない、
貧しさのない、
いためつけのない、
はずかしめのない、
専制と隷従のない、
こんな世の中を創り出さねばならぬ。

かゝる解放された、人の世を創り出すために、
われわれは、ここに固結を誓いあい、
更に加わらんとする迫害をも覚悟して、
決然たって奮起した。

あゝ、われわれは、
心から、人生の熱と光を、願求礼讃するものである。
人生の熱と光とをねがい、
人生の熱と光をたゝえる！

あゝ、何と言う崇高なる思想であることよ！

「水平社はかくして生まれた、
人の世に熱あれ、人間に光あれ。」

水平社は生まれた！

差別の現存することは、
人類普遍の原理に悖る。

水平社は、生まれるべくして、生まれたのだ。
生まれるべきは、社会の進歩の必然であり、
生まれるべきは、幸福追求の当然である。

水平社は、かくして、生まれるべくして生まれ、
不当な差別の事実に対し、
それを排除する正義の闘いを展開するものとして、生まれた。

斗いだ！
斗いだ！
差別の排除、
それを成し遂げるのには、
斗いあるのみである。

われわれは差別の不当を糾弾する。
それは、聖なるいとなみ、
それは、正しいしぐさ。

しかるにこの行為を、
あらゆる方法にて妨害し、
さまざまな手段にて弾圧し、
不当行為と、きめつけた。

誰だ、それは！

これこそは、まさに、にくむべき差別、
まこと、にくむべき差別の元兇。

されど、されど、
われわれは、斗い、たたかい、たたかいつづける。
迫害、圧迫、弾圧、
それをはねのけ、はねのけ、撥除けつづける。

見よ、
このたたかひの姿、
これこそは、まこと、人間の美しい姿、
人間のけだかい姿。

世の中の、すべての人よ
この姿を賞讃せよ！
この人々を讃美せよ！

水平社はかくして生まれた。

宣言は、水平社結成の深い意義を述べて来た。
宣言は、水平社同人に、貴い教訓を語って来た。

水平社同人の結集は、
輝かしたたかひの歴史をつみあげ、
差別と屈辱の怒りを累積し、
自らの手によって誕生したのだ。

しいたげられた同人は、
今、しつ黒の差別のとばりをひき裂こうと、
隷従と圧制のきづなを断ちきろうと、
決然と奮起したのだ。

人の世に熱あれ、人間に光あれ！
あゝ、何と感動に充ちた叫びであることぞ！

かくもすばらしい宣言は、いずこにかある。
フランスの自由・友愛の人権宣言にもまさる、
ソビエトの労働の革命宣言にもまさる、
他の、世界のいかなる人権宣言にもまさる、
かくも格調たかい人権宣言が、
今、こゝ、京都岡崎公会堂にて誕生したり。

あゝ、何たる感動！

満堂は、今、ゆれている。
しいたげられた全国の同志は、
しっかりと固くつき合った。
それは、結成をよるこぶ安易な抱ようにあらず、
それは、解放を誓いあい、斗いを誓い合う強い抱よう。
いためられた全国の同人は、
とめどなく涙を流した。
それは屈辱を省みる悲歎の涙にあらず、
それは斗いの厳しさにうちかつ決意の涙。
うおーっ！堂に喊声があふく。
それは虚声の叫びにあらず、
それは、たたかひへの出陣の咆哮。

友は友をよび、
魂は、たましいをよぶ。
旗は、ちぎれよとばかりうち振られ、
こぶしは、にぎられ、空を突いた。

全国の特種部落民よ団結せよ！

あゝ、世界にさんたる大宣言は生まれた！
人間解放の大宣言は誕生した！

これは部落大衆の血潮の中から生まれた宣言！
これは部落大衆の生命の泉から湧き出した宣言！
この大宣言はわれわれの血潮そのもの！
この大宣言はわれわれの生命そのもの！

あゝ、人の世に熱あれ、人間に光あれ！
人の世に熱あれ、人間に光あれ！

あゝ、水平社宣言讃歌！

(西口 敏夫 著「詩集『水平社宣言』讃歌」より)

1991年度第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業の記録(板野中学校3年B組)

主 題 「誇りうる生き方を求めて」

1991年11月19日(火)

資 料 「水平社宣言讃歌」(西口敏夫)

授業者 森 口 健 司

T 1: まだ少し時間があるんですけど、この前の全国大会(全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業)の日に書かれた生活ノートを紹介して、思いを新たに今日の50分の授業頑張りたいと思います。

《1991年10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかもしれない」と思っていた板野郡同和教育研究大会の授業さえ影が薄くなってしまう程の授業だった。昨日このノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しビビって、それでも隣のO君としゃべったり、緊張のせいか顔がこわばっていたH君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことが嬉しい。この授業に火をつけたのは、やっぱり部落問題学習のことを出したNさんだと思う。3年生になってからは2週間に一度くらいのペースで公開授業があって、嫌々受けた授業も何度かあった。でも、今日は部落問題を学習したからこそ成り立ったんだと思う。やっぱり学習してきてよかった。これで私なりに同和教育はすべての教育の根幹にあり、教育そのものであるということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もっともっと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、ついつい顔がほころんでしまった。「ナイン」について言いたいことは全部言ったという感じだった。板野郡同和教育研究大会の授業の終わったとき女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにこにこしていた。Iさんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPでも贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸がいっぱいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとても嬉しく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究大会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの方がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そしてありがとうございました。》

今日の授業、今まで取り組んだ2年間のいろいろな思いが集約した1時間になるように頑張りたいと思います。始めます。(礼)

T 2: 今日一筋の光を求めて、みんなと部落問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。今まで取り組んできた部落問題の学習、その学習に寄せる思いを込めてみんなで読み合った水平社宣言讃歌について、(板書「水平社宣言讃歌と私」)水平社宣言讃歌が私にとって何であるか。今までの学習を通してかつての自分、今の自分を振り返りながら、思いを語り合いたいと思います。

SE(女)この資料を一番最初に読んだ時は、なんかやたら長くて読む気もあんまりならんかって、2回目ちょっと読んでみた時は、やっぱり半分くらいで何が言いたいかわからんかって、3回目ぐらいからわかってきたような感じがして、それでもまだよくはわかっていません。私にとってこの水平社宣言讃歌という詩は、今までの資料の中で一番難しく、それでも一番身近に感じる資料です。

HM(男)僕から見てこの水平社宣言讃歌は、僕がずっと前からいつも言っていることだけど、団結という言葉が好きで、その団結という言葉を変えてもっと好きになったような学習をした感じがします。団結は弱い者が強い者たちに勝つための一つの手段であるというのが好きです。団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかったし、このような見事な部落問題学習とかには取り組めなかったと思います。

KK(女)さっきのM君の意見によく似ているんだけど、私も団結という言葉が好きになって、郡同研の時にはすごく燃えたんだけど、途中いろいろあってそれで全道研の時にNさんとかが支えてくれたのが嬉しかったです。

KH(男)水平社宣言讃歌は僕にとって、今までやってきた全部の資料の総まとめで、今までの資料のすべてがこの中に入っているような感じがします。

KU(男)この水平社宣言讃歌は文としてはあまりまとまってない感じなんだけど、何かすごい力強いものを感じて、これが部落の人たちの本当の思いであるし、人間としてのあり方もすばらしいあり方を述べていると思います。

SN(女)私もみんなと同じで今までいろいろな資料を学習してきたけど、「渋染一揆」にしても「意識の芽ばえ」にしても、今までみんなと勉強してきた資料は、結局この水平社宣言につながっていたんだということが水平社宣言讃歌を読んでわかりました。

MM(男)この水平社宣言讃歌を勉強して、その前に水平社宣言を学習して何となくだけどその水平社宣言を自分の生き方につないでいったんだけど、この水平社宣言讃歌を勉強したら、水平社宣言に書かれていることは、もっと生活の上に生かすことがたくさんあるんだということがわかってきたと思います。宣言の中に「われわれがエタであることを誇りうる時がきた」というのがあるけど、水平社宣言讃歌によって心から、自分が部落に生まれたということを誇りうる時がきたのだというように受け止められるようになりました。だからこの水平社宣言讃歌は僕が生きていくための支えとなり、また授業を頑張っていくためのエネルギーとなり、僕らにとって今まで学習してきた中で一番大切な資料になりました。

YI(女)この資料は私にとってとてもいいものになったと思います。今まで私が一番好きだった資料は佐藤文彦先生が書いた「美しさを求めて生きる人生を」というのが一番好きだったんです。今までやった資料で部落の人が自分たちのことを書いた資料は、何かその人の気持ちになりにくくてわかりにくいことがあったけど、この水平社宣言讃歌というのは、部落に生まれたとか生まれなかったとか、そういうこと関係なくて人間としてあたりまえのこと訴えていると思うんです。今までの学習で自分も成長してきたからこんな思いになれるんだと思うけど、絶対部落差別はおかしい問題なんだから、自分が部落に生まれた生まれなかったというのは関係なくて、一人の人間として考えてみたら、本当におかしい問題だということをはっきりさせてくれた資料であり、すごく自分に一番近いというか、わかりやすい資料だったと思います。

HI(男)さっきのM君の発言につなげるような形になるけど、僕も水平社宣言や宣言讃歌を勉強してきて、自分の生き方の支えとなるものがいっぱいできてきたと思います。この資料を勉強し

ていなかったら、やっぱりずっと部落に生まれたことを隠していこうという気持ちが先にきて、部落差別とたたかって生きるというような思いは沸き起こってこなかったと思います。今、なぜか嬉し涙というのか、何かそういうふうなのが流れてくるんだけど、やっぱりこの勉強してよかったと思います。

SN(女) I君を始めクラスみんながいて、私が意見を言ったら、手を挙げて私の意見に付け足してくれたり、また誰かが言った意見に私が付け足したりして支え合っていて、そんな仲間ができたのはこの勉強をし始めてからで、水平社宣言讃歌という詩は私も一生大切にしていかなければならない一つだと思いました。

KH(男)僕もNさんと同じで、やっぱり自分が発言したらみんなもそれに応えて発言してくれることがとても嬉しいです。そしてこの資料がなかったら差別の深い意味を一生わからずに過ごしていたかもしれません。

KT(女)私はこの資料やこの学習から、自分一人ではないということがわかりました。怒りを言葉に変えることで、相手に苦しみや悲しみが伝わってよりよい人間としての結び付きが生まれ、私たちは深い絆で結ばれていくことがわかりました。

TS(男)僕はこの学習の中から、このクラスはとてもすごいなあと思いました。3年生になったとき、始めの頃はあまり友だちもいなかったので不安だったけど、いろいろ溶け込んでいって郡同研や全道研や、すごい授業ができてとても嬉しかったです。

YI(女)ちょっと資料から離れるんだけど、私たちはずっと2年生の時から部落問題学習に取り組んできて、今までの授業の中ではすごく悲しくて涙を流すこともあったけど、今のみんなは悲しみではなくて差別に対する怒りで燃えていると思います。そして、前の郡同研の時はこんなにたくさんの先生方はいなかったけど、この県同研ではこんなにたくさんの先生方が私たちの授業を見に来てくれたということは、私たちにはすごいそれだけの力があるんだと思います。私たちには人を変える力があるから、絶対差別をなくすという自信も生まれてきました。やっぱり部落問題学習に取り組んできてよかったと思います。

MM(男)今のI君の涙のおかげで、みんなの支え合う関係がより強まり、またみんなが熱く燃え上がることができたと思います。郡同研の時はまだ悲しみの涙だったと思うけど、今は違うと思うんです。今のI君もそうだったけど嬉しくてたぶん僕と同じような考えを持っているんだと思うし、人の涙というものはたぶん嬉しい時に流すからこそ、その一粒一粒の涙が一段とすばらしいものになるんだと思うし、悲しんでいるだけだったらこの問題は絶対に解決の方向には進まないと思います。このクラスは絶対自分の意見を本音でぶつけ合う授業ができていて、もし嘘で言っていることがあったとしてもそれを見抜く力がみんなにできています。でも最初の頃や1年生の時なんかは、うわべだけでほとんど自分の心とかをみんなにさらけ出すことがなかったけど、この1年半みんなとこの学習を続けてきて、みんなをよりよくわかって信頼する関係ができて、ナインでも習ったように絆とか団結とかの強さを知ることができたし、今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていけるんだと思うし、たぶんみんなもそうだと思うから、まわりのみんなを信頼して頑張してほしいです。

SN(女)私も昔は本当に恥ずかしいんだけど、差別に無関心で小学校の時とか中学校1年生の時とか勉強していたことはしていたんだけど発表もあまりしなかったし、建前ばかりで差別はいけないとか、そういうふうなことばかり言っていたけど、2年生になって森口先生のクラスになって初めて差別の深いところまで知ったというか、そういう話し合いができるようになったん

だけど、やっぱり始めの頃はしんだいなあと想着、私には関係ないって思いよったんだけど、2年生の全体学習の時に友だちが泣きながら自分が差別されてきたこととか、部落出身だということなどを打ち明けてくれた時から、やらないかんと思いたして、友だちをそこまで苦しめる差別を許したらいかんというふうに想着、真剣に取り組んできたんだけど、やっぱり私一人では差別はなくならないけど、このクラスのみんなとだったら差別をきつとなくせると思います。YO(男)郡同研の時にI君とか、たくさんの子が涙を流したけど、今I君が流した涙は喜びの涙に変わっていると思います。

HM(男)僕もNさんと同じで中2の時は発表をしていたかもしれないけれど、ただ紙に書いた文をただ読んでいただけで、心の奥底にある思いを語ったりすることはなかったと思います。今はそのときそのときに思うことを友だちの発言を聞きながら、感じると思うことを素直にまとめて発表するようになってきました。昔は授業前に書いた文章を読んできたので授業の中で沸き起こってきた僕の本当の気持ちをみんなに伝えることができなかったと思います。この学習はただ文を読むのではなく、そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならないと思います。それから今勉強しているのに下を向いていたりしている子がいたら、上を向いて発表してください。

YI(女)私は中学校1年生のとき、やっぱり道徳の授業とかもあったけど、必ず自分のクラスに部落の子がいてあんまりめったなこと言うたら、やっぱりやばいとか思っていて、結局綺麗事でも何にも差し障りのないような言い方しか言えなくて、それで2年生の時に全体学習とかでまず本音を語るということをして、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めてそれからなんですよ、真剣にこの問題に取り組み始めたのは……。それで3年生になって振り返ってみたら、今はその部落の子とかそんな関係なしに差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんですよ。だからそう自分が変わったことが今はとても嬉しく思います。

KO(女)私は2年生に入って公開授業を始めた時、どうしてこんなことするんだろう。こんなことするからみんなは部落のことを知ってしまい、部落差別がなくなると思っていたけど、そのまま放っておいたら、やっぱり昔の人たちが孫たちに間違ったことを教えてしまうから、今の私たちが正しいことをしっかりと真剣に勉強しなければいけないと思うようになってきました。そして、そうすることによって何年か先には部落差別は必ずなくなっていくと思います。

KT(女)誰でも自分の苦しい部分を語っていくということは苦しくつらいことだと思います。けどその苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この部落問題の学習を積み上げてきて思うことは、歎くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変われるということがわかりました。

SE(女)全道研の終わったときに先生が、「先生が部落の人だからあんなに頑張れて、あんな授業ができるというような囁きをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんながこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやさしかったです。

KK(女)私もEさんと同じで先生から先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじゃと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるんかなと思いました。

YI(女)私も先生からの話を聞いたとき、すごくくやしくかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなくて自分自身のためにこの問題の学習に取り組んでいるつもりです。

MM(男)その先生はたぶん、この学習の本当の重要性が受け止めることができているんだと僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかったということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていくと、自分の差別意識は棚において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別意識とかに気づいてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。そのことは僕も僕の中にも差別意識があつてこの学習をしっかりと続けていかない限り、その差別意識は年をますごとに段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいと思っています。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかった人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人だと僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生はものすごい喜びがあるけれど苦勞も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないということだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくってはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思います。

T 3: 今のM君の発言につなげてほしいです。

KH(男)全道研の授業のとき、先生をあの人には部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけでこの部落ということが大変な差別の問題であるという自覚がないんだと僕も思いました。さり気ない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだつて起こってきたこの差別の問題をもっともっと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

SN(女)私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおつたと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと部落問題について学んでなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というものもあるけど、将来部落問題学習に対

する本当のことを知らないですっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

KK(女)昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけないんだと思いました。

YI(女)この前の授業のときも言ったけど、部落問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなで一緒にやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしいけど……。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。

T 4: 水平社宣言讃歌についてみんなにいろいろな思いを求めたんですけど、やっぱり今までに取り組んできたものがあまりにも大きすぎて、宣言讃歌と今までに学習してきた思いとがいっぱい重なっていきますね。これは今までの学習の中でも話したんですけど、先生にとってこの宣言讃歌は宝物なんです。西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」という一冊の本、大事に大事にしています。その本の中にある「よろこび」という詩はこの十年近く心の支えとしている詩です。みんなと部落問題学習を積み上げてきた一つ区切りとして、大きく飛躍し、より大きな峠を越える一つとして、この宣言讃歌を勉強してきたわけですけど……。讃歌に触れててもいいです。今まで取り組んできた中で、全体学習やクラスの部落問題学習、そういったものを思い起こす中で私にとってこの学習とは何だったんだろうか。かつての自分、今の自分、自分自身の奥に流れてきたもの、今流れているもの、そういうものを思い返しながらかつて部落問題学習に寄せる思いをあと残された時間、語り合いたいと思います。

MI(女)2年生からこの問題に取り組んで公開授業とかいろいろやってきたけど、さっきM君が言ったように私は下を向いたままで発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を見ていることは、その人を絶望さし、その人を殺すことになると思ってしまうようになって、絶対私は信頼を裏切る、人を殺すような人間にはなりたくないと思いました。

TK(女)私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落に生まれたと聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも郡同研のときは自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができ

ました。でもそのときもなぜか悲しくて泣いてしまいました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあったのと、友だちを心から信頼できたからです。私はその友だちに感謝しています。

MS(女)今までの私は部落に生まれたということは、隠さなければならないものとしか考えていなかったけど、郡同研のときに私が部落に生まれたと言ったときみんなが支えてくれて、みんなが一つになれたなあと思いました。私は部落問題を学習していくことは人と人をつなげていくことだなあと思います。

TF(男)今までこの学習をしてきて、最初の頃は手を挙げて発表するときに、自分で手を挙げようと思っても、10分ぐらい手を挙げることができなくてそのままみんなの意見を聞くだけだったんです。でもみんなの意見を聞いている中で、僕自身の中で変わっていくものがいっぱいあってやっと手が挙げられるようになったんです。それでも長い時間が流れていくうちに部落問題をやっぱり自分には関係ない問題という気持ちが出てきて、また手を挙げれんようになって、今も頑張らなあかんという気持ちと自分には関係ないという気持ちの両方があるんです。だから、いつもこの授業の度に自分を反省しながら頑張ってきているんです。そんなときにある子が資料についての考えをまとめる学習プリントをそんなん適当に書いとけと言ったことがあるんです。そのとき僕はものすごく腹が立ったんです。その子と同じような気持ちにならんと心の底から腹を立てることができたのは、僕の中にまだ弱い部分もあるけど心の底から部落問題をなくしていなあかんという気持ちが強いんだと思って、この気持ちを大切に頑張っていかなあかんと思って今頑張っています。間違っていることを間違っていると言えることってほんまに大切やと思います。僕は間違っている友だちに「そんなこと言うな」と言えたことによって、自分というものに自信を持ちました。

HI(男)今日もまた一つ大きな峠を越えれたと思います。やっぱりみんな頑張っているから、自分も胸張って頑張っていくことができるんだと思います。やっぱり「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で、やっぱり人間みんな一緒なんだと思います。部落に生まれた部落に生まれなかったということにこだわるのではなくて、一人の人間としてこれからずっと下を向かずに胸張って頑張っていきたいと思います。そして、やっぱり何かしらんけどいつも涙が出てきてしまうんだけど、これからは涙を流さないようにずっとこの学習やこの出会いを大切に、ずっと将来も頑張っていって、この3年B組の絆というものをいつまでも持ち続け頑張っていきたいと思います。

SF(女)私はこのクラスになってから、中1のときにいじめられた子に今も変な目で見られているということをよく話したんだけど、それってすごい私の誤解だったんです。この前のその子と自転車置き場で会ったんだけど、その子が話し掛けてきてくれてなんかその子がすごい変わったなあという感じがして、すごく嬉しくて何か私もその子のことすごい悪い目で見っていたけど、それってすごい私が誤解していたんだと思ったんです。ある意味で私とその子を避けて反対に仲間外れにしているような感じだったけど、その子が話し掛けてくれたときに、この子はこんなに変わっているのに、私の勘違いでこの子を逆に苦しめていたんじゃないかなって、すごく自分の狭い心が情けなくなって自分の思ってきたことを反省したんです。そして、ほんとは公開授業とかがすごくいやだって、公開授業のときも何も考えずにぼんやりしていることがあったんです。でも3年生になって森口先生のクラスになったときに、IさんやNさんやM君とか

いろいろな人がすごい発表して授業中胸がいっぱいになってきて、心から私も頑張らないかんと思うようになってきたんです。ほんとにIさんやNさんやクラスみんながいてくれて私もこんな考えがもてたんだなあ、すごくみんなにお礼が言いたいです。

YN(女)2年生から取り組んできた全体学習を始めとする部落問題の学習は、私に勇気を与えてくれました。その中でいろんな友だちが自分をさらけ出して語ってくれているのに、私は下を向いたままずっと黙っていました。それが今では発表することはまだまだ難しいけど、語ってくれる友だちの言葉を自分なりに一生懸命に受け止めることができました。それが私にとって一番嬉しいです。

JK(女)2年生から部落問題の学習をしてきた中で、私の心も大きく変わったと思います。自分が部落に生まれた人間として、自分自身の本当の気持ちをぶつけるような発言はできませんでした。でもこの前の全道研のとき、このクラスのみんなに自分が部落に生まれたことを打ち明けました。自分の心の奥にある本当の思いを語っていくことにより私は、人間としての本当の生き方をつかんでいくことができるんだと信じたからです。本当のことを訴えていくことはすごく勇気がいったけど、みんなが私を思いきり支えてくれました。あの授業の後、私は本当の友だちができたんだと思いました。自分の心を締め付けていた重苦しい部分を語る事ができ、これからの人生を人間として堂々と生きていく喜びをくれたのは、先生や3年B組のみんなが支えてくれたからだと思います。

KT(女)私はずっと前2年生のときは、自分には語ることはできないんだと信じていて、それを理由に発表することから逃げていました。それで繰り返し繰り返し発表できる子や語れる子がうらやましいとずっと思っていたんだけど、でもそんなことうらやましいと思うのがおかしいと思いたして、自分にもできないことはないんだと信じて発表したら、昔のことが嘘のように発表できるようになりました。まだ手を挙げる事ができていない人も、絶対できないことはないので一生懸命手を挙げて発表してみてください。

T 5: はい、頑張りましょう。

KK(女)部落に生まれたというとても苦しいことをみんなに語っていき、自分自身が人間として胸を張り堂々と生きていくことができるかどうかは、周りのみんなの取り組んでいく姿勢や雰囲気によって決まってくると思うんです。いくらその人に勇気があったって、周りがしらけていたりみんなでも共に頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上がれるものではないし、語ることもできないと思うんです。一人一人の仲間を支える周りの雰囲気がとても大切だと思います。みんなでも一人一人を大切にしていって、よりよい雰囲気を作っていくことができるように頑張っていきたいです。

MO(女)私はこの前、クラスの中で部落問題について話し合っていたときに、「自分の中にはおじいさんとかおばあさんとかが差別してきて部落の人を苦しめてきたという、人を差別してきたという血が混ざっているのがいやじゃ……」と言ったときに、Iさんとかが「この勉強を徹底的にしていって、そんなこと言うのがばからしくなってくる。OさんはOさん自身でしかないんで……」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。今までこの学習をしてきて私は差別していないと思っていたんだけど、この資料を読んで自分の中にもものすごく差別していたところがあるのに気付いて、自分の中にこんなに差別意識があるのに、何かずっと無関心だったことが恥ずかしかったです。

MM(男)涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ部落問題の授業をやっているって、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切にしていって、絶対部落差別をなくしていかなければならないし、大きくなっても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。

RS(女)部落問題を学んできて私は変わったと思います。1年生のときにお母さんとかお父さんの前で部落問題の話をしたとき、お父さんもお母さんもとてもつらそうな顔をしたから、もうこのことは絶対口にしないと決めていたけど、この頃だったらお母さんとかお父さんの方から部落問題のことを話し掛けてきてくれるようになりました。私は部落問題の学習は人間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思っています。

KU(男)この学習をするまでは、クラスの友だちでも言葉の上の仲間という感じで、よく知らない友だちもいたんだけど、この学習をしてきて一人一人が自分の存在を自覚してみんなが助け合う雰囲気ができているから、本当の仲間というのが何であるかがわかってきて3年B組のみんながすごい固い絆で結ばれたと思います。

SE(女)この学習をしてきて私のはっきりと思ったことは、人を変えていくのは周りであって、自分が変わるのも周りの影響があって変わっていくんだと思いました。この学習のおかげで私たちは何かすごい絆というか、切っても切れない結び付きができたと思うし、このメンバーだったら高校へ行って離ればなれになっても、挫けそうになったらまた会って自分のことを言い合えて支え合っていけるという自信があります。

MT(男)2年生の最初に先生と出会って、そのときに最初先生が「わしの目を見い」と言うて「目を見て話をするもんじゃ」と言うて、先生の目を見ていてこの先生はどこか違うなあと思いま

した。それでいろんな資料を勉強していく中で最初の方は、何か自分の書いていることでも発表しようと考えて、震えながらも手を挙げて発表していたんだけど、繰り返し授業があった中で発表しないで授業を終わったら楽だって、その後の授業も発表せんと黙って下を向いて授業を受けたら楽だって、でもこのままずっとおるのではあかんあと思うて、何回か手を挙げて言おうと思ったんやけど、なかなか手が挙がらないでいたんだけど、差別は絶対許したらあかんし、周りの雰囲気流されて部落の悪口を言う人間に絶対ならないためにも、楽な道を選ばずに僕自身を鍛えるためにも発表していかなあかんと思うし、その頑張りが大きくなっても周りの雰囲気に流されないような人間になっていくことにつながると思います。

KM(女)私はこの学習に取り組んでなかったら、差別意識があつてずっと差別していたと思います。それでこの学習に取り組んできて少しずつだけ差別意識がなくなってきたと思うから、この学習に取り組んでよかったです。これからもこの学習に取り組んでいきたいと思ひます。

SN(女)道徳教育の全国大会のときに、私の友だちが一人手を挙げられなかったと言つて、すごい気にしとったんだけど、それでみんなのこと裏切ったことになるのか言つて、すごい気にしとったんだけど、それで「今度頑張ったらええで」と言うたら「今度頑張る」というふうに言つて、それで今発表してくれてすごく嬉しいです。

KT(女)下を向いているのはやめてください。何も逃げることもないし、何もおそれることもないと思ひます。緊張はみんな一緒だと思ひます。今日自分は手をあげられなかったと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切にしてくれてほしいと思ひます。

KN(男)僕は2年生のときは、部落問題とかはどうでもいいと思ひていました。全体授業のときでも先生に当てられて「ああ、いややなあ」と思ひながら、学習プリントを見ながらでしか発表できなかつたけど、今はこの3年B組になってから下手でも自分で下を向かずに発表できることができたのが嬉しかったです。

KK(女)50分という時間はすごく短いような気がします。私はもうだいたい80%くらい、私の心は変わっているけど、まだ変わっていないところもあると思うのでB組のみんなと一緒に変えていきたいと思ひます。それで私のお母さんとか家族の心も変えていきたいと思ひます。

YI(女)もう時間がきてしまつて言いたいのになかなか言えなかつた人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張つてほしいと思ひます。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思ひます。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かつていかなければいけないと思ひます。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かつていきたいと思ひます。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願ひにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんですよ。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張つた姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずずっと差別解消の日まで頑張つてほしいと思ひます。

T 6：終わります。